

平成紙



おりおりの記

オーケストラの働き方

東京フィルハーモニー交響楽団
専務理事・楽団長（元打楽器奏者）

石丸 恭一

先輩：「石丸君、明日仕事に来てくれ、曲は白鳥湖の本番、夜九時からね、三幕から」

1970年2月、出来心でシベリア鉄道モスクワ経由でベルリンを目指し、前夜遅くベルリン・ドイツ・オペラ（Deutsche Oper Berlin）の団員である先輩の家に転がり込んだところだったのです。

西洋のオペラ劇場では通常の出し物であれば特別なこと（新演出など）がない限りオペラでもバレエでも練習は無く、殆どぶっつけ本番であることは知っていたのですが。

私：「三幕からですか!？」

先輩：「団員の一人がその時間から放送局へアルバイトに行くのでね」

ドイツの誇るベルリン・ドイツ・オペラの楽員は当然給与雇用なのであります。

翌日、三幕から交代してピットに入るとそこは日本と変わらない世界で、譜面も楽器も服装も楽員の態度、雰囲気すらも日本のそれと全く変わらず「クラシック音楽は世界の共通語」なんだなと呆気ないほど感じたのです。

ただ一件を除いては…「なぜ団員がアルバイトに行けるのか？」

オーケストラは、それまで個別の演奏楽器であったものを、300年位前ハイドン・モーツァルト・ベートーヴェンの時代に合奏として徐々に大きくなりドイツを中心に現在の形になったと言われています。個人の演奏家を集めたものだからそ

の人件費は膨大でその時代に王侯貴族の富の集中によって可能となったのでしよう。

その後、民主主義の時代となりドイツを中心に国民のために国家が税金で雇

用するという形が確立し、その団体と個人（アーティスト）の折合いを付けた運営モデルと膨大で複雑精緻な音楽は人々を魅了し、100年を経ない間に社会の制度の違いも超えて全世界へ広がりました。「その国の文化程度はクラシックオーケストラを見れば分かる」と言われた時代でした。

団体は国の法律に依って変わりますが団員（アーティスト個人）は芸術を創る事によって守られる。団体と自由な個人を限りなく生かす事がオーケストラの価値なのです。

楽員に上下の関係は無い。勤務は楽員の選択。採用は楽員の採点（オーディション）。労働時間は上限在り下限なし。そして、アルバイトの自由（たとえ同業他社であっても）。

現在の「働き方改革」は元々オーケストラの原点です。社会のグローバルスタンダードの答えは時代により様々に対応して来たオーケストラに在るのかも知れません。

